

謹賀新年

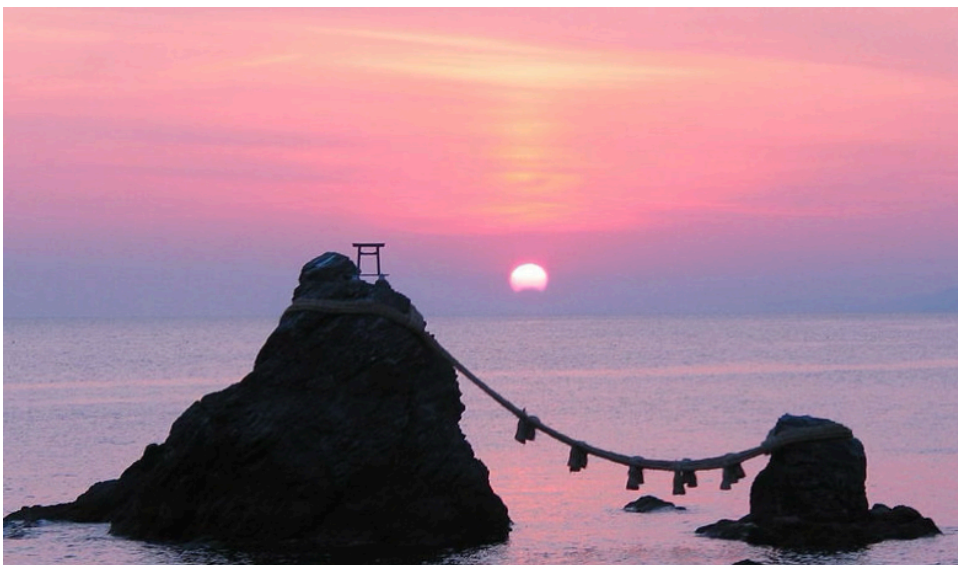
令和八年・昭和百一年
 Happy New Year 2026 !
 Shāntam Nirvānam !
 常樂我淨・涅槃寂靜
 May all sentient beings live
 in peace!



旧年中にいただいた皆様のご縁とご厚情に感謝し
 新年の平安とみなさまのご安穩を念じ上げます

碧空を貫く冬の陽光に樹々の緑の光る朝なり

令和八年 元旦 和国・日本 村石恵照



伊勢・二見興玉神社（ふたみおきたまじんじゃ）の夫婦岩（めおといわ）から眺めた200キロ先の富士山の背後から昇る朝日（Tawashi2006）。

夫婦岩の間の遠い彼方の水平線から朝日が出るのは夏至（毎年6月21日/22日）を挟む前後2カ月間。

夫婦岩を結ぶしめ縄の間にある小さな岩は子供のように見えます。

大自然と神話と人間関係の在り方が一体となって日本文化の「和」の感性を象徴している、実によくできた構図です。

七福神



七福神の構成はインドの神格が三体、中国の尊格が三体、日本の神が一柱でまさにラッキー7。インドの女神が前列の中心で和楽を奏でています。

七福神信仰に関わる初夢の「回文（かいぶん）」（最初から読んでも最後から読んでも同一の文句）があります。

「なかきよの とおのねふりの みなめさめ なみのりふねの おとのよきかな」
 <眠れない長い夜のような迷いの人生を旅してきたが、新年の今夜こそは迷いから完全に目覚めて平和の願いの込められた宝船に乗って、ころよい波音を聞きながら、人生を安らかに過ごしてゆこう>

正月2日の夜、この回文が書かれた七福神の宝船の絵を枕の下に置き、回文を3度読んで寝ると吉夢（きちむ）が見られるという俗習が知られています。

この回文には様々な解釈がありますが「（迷いの）夢から目覚める」という表現には「いろは歌」のに内容に準じた仏教的「夢の世界観」の発想が基本にあるようです。

この初夢の回文と七福神信仰の習合は15世紀ごろには成立したようですが、ここには和の日本文化の心が凝集されています。「七福神」は人々が現世において女性が奏でる和音を聴きながら生きる幸福観念を象徴しています。ちなみに7は一種の聖数（ある特別な意味を暗示している数）で、すべての仏たちが守っている共通の戒律が「七仏通戒の偈」です。

七福神とは、なにか

○ インドの「デーヴァ（神）」

・大黒はヒンズー教の破壊と創造の神・シヴァの化身。原語（インド・サンスクリット語）ではマハー・カーラと言います。マハーは大、カーラは黒の意味。カーラ (kāla)には時間の意味もあります。時間の故に世界の有為転変、悲喜劇の展開があります。

「大黒」の漢字を「大国」と読み替えて「大国主命（おおくにぬしのみこと）」として、インドのヒンズー教のデーヴァと日本のカミが習合しています。大国主命は島根県にある出雲大社の祭神です。島根とは、島（日本列島）の根（中心）の地域であると私は解釈しています。

出雲大社の大国主は大地・母性を、伊勢神宮の天照大神（あまてらすおおみかみ）は天上の光・父性を象徴して、両神社で「和国」の日本はバランスを保っているかのようにですが、実は伊勢神宮の内宮に祀られている天照大御神は女性の神です。日本神話は、実に微妙な複雑性を帯びています。

・毘沙門天は原語ヴァイシュヴァナの音写で、この神はヒンズー教では戦いの神でしたが、仏教に帰依して福神となりました。その福德が多方面に聞こえているというので多聞天といわれます。古代インドの世界観である須弥山世界を守る神である四天王の一つで北方を守護しています。

・弁才天の原語はサラスヴァティと言い、河川の神の一種で、音楽・芸能の神ともされ楽器を持っています。七福神で唯一の女神で、弁財天と訳されて豊穰の女神と見なされています。

○ 中国の「神」

・寿老人は富貴長寿の神。日本の七福神の一人としては白鬚明神（しらひげみょうじん）とされます。

・福祿寿は南極星の化身とされる道教の神で、幸福・長寿の象徴です。

・布袋（ほてい）尊は、かつて中国の浙江省で活躍したといわれる禅僧がモデルといわれます。その満面の笑みを浮かべた大きなお腹の姿は満足感・幸福感の象徴で、理屈っぽい人生観にうんざりした一部の西欧人には Happy Buddha（しわけのブッダ）として好まれているようです。



布袋・萬福寺（宇治市）

○ 日本のカミ（神）

・恵比寿は七福神の中で唯一の日本由来のカミ。エビスはエミシ（アイヌの自称）ともいわれ、また夷（えびす）とも書かれて、海の彼方から漂着した漁神で蛭子（ヒルコ）と同一視もされています。現在は商売繁栄の神です。えびす顔といえばニコニコ顔のことです。

恵比寿は七福神の中ではもっとも複雑な由来を持つカミ（神）で、日本人の出自と文化的情念の複雑さも暗示しています。（ちなみにサッポロビールは「エビスビール」をつくりましたが、1906年（明治39年）にエビスビールを輸送するための駅として「恵比寿駅」ができ、その後1966年（昭和41年）に正式な町名となった、とのこと）。

ともあれ、インド・中国・日本三国の精神文化を代表する集合情念の象徴である「神々」が、女性の神の奏でる和の音を楽しみながら新年の船出をするということは、よきかな（和語）・善哉（漢語）・スヴァーハ（サンスクリット語・「幸あれ」）であります。

和国の教主・聖徳太子が説く「まことの心」は、人種・民族・宗教の別を超えて、常に弱い立場にある人に寄り添う心です。

「まことの心」から外れがちな「わたし」ですが、アジアの人々をはじめとして世界の人々と、民族・宗教・人種の別を超えて仲良くできる新しい文明と文化を目指して生きたいものです。

新年を迎えて みなさまには あらためて ご健勝とご安穩の日々を念じあげます

令和八年 元旦 村石恵照 拝